

第5回  
だいごかい

# 日本語の教え方

# 伊呂波

## 聴解

日本語国際センター専任講師 横山紀子  
にほんごこくさい せんにんこうし よこやまのりこ

海外で活躍している日本語教師のみなさんから、よく「日本語教授法を知りたい」「すぐに使える授業活動を提供してもらいたい」という要望をいただきます。

「日本語の教え方 イロハ」のコーナーでは、日本語国際センターの専任講師が、日本語の教え方を学んだことのない方に、「コースデザイン」や「読解」「会話」「聴解」「評価」などの基本的な教授理論、教授知識をわかりやすく解説します。既に日本語を教えている方も日本語教授法に関する基礎固め、知識の再点検にお役立てください。

### 聴解指導で教師ができることとは？

聴解指導での教師の役割は何をすることでしょか。ここでは、学習者に音声テキストを聞かせて理解を確認するだけでなく、学習者の聞く力を積極的に伸ばすことを重視して考えていきます。聴解指導で教師ができることは、大きく分けて二つあります。

- (1) 学習者に聞かせる音声テキスト（日本語の音声）を準備する。
- (2) 学習者が聞いて理解する「過程」を助ける。

以下では、この二つの役割について順番に述べます。

### 音声テキストの種類

学習者に聞かせる音声テキストとしては、市販の録音教材を使うのが一般的だと思いますが、他にもいろいろなことが考えられます。まず、周囲の日本人や日本語話者の発話を録音してテキストとして使うことができます。海外では、このような録音のチャンスが少ないことは確かですが、例えば学習者の先輩（日本語コースの上級生）や他の教師が学校や地域の行事について情報を伝えたり、感想や意見を述べたりするものなら比較的簡単に録音することができます。日本に留学した先輩や日本語を使って仕事をしている先輩の話などは、学習者の関心も高いのではないのでしょうか。学習者の日本語のレベルを知っている先輩や教師であれば、学習者に合わせたレベルの日本語で話してもらうこともできます。

聴解指導に使える音声テキストは、録音だけではなく、教室の中で教師が話す日本語、他の学習者が話す日本語も大事な聴解のリソースです。話の内容は、

家族の紹介、休日の経験、趣味の話、最近見た映画や読んだ本の紹介、社会問題に関する意見など、学習者のレベルに合わせてさまざまに考えられます。

日常生活の聴解をふり返ってみると、録音を聞く聴解よりも、話し手と対面して直接話を聞く聴解のほうがずっと機会が多いことがわかります。話し手と対面する聴解では、音声による情報を理解することだけでなく、次のようなことが必要です。

- ① あいづちを打つなど適切な反応を返す。
- ② 必要に応じて質問をして自分の理解を確認する。
- ③ ジェスチャーなど非言語的要素によって伝えられる情報を理解する。

①～③のような聴解技能は、LL室で黙って録音を聞いて理解確認の課題に答えるだけでは養成されません。聴解授業では、教師やクラスメイトの話に対面して聞くような活動もぜひ取り入れてください。

### 音声テキストから言語を学ぶ

聴解学習の目的としては、音声テキストを理解することに加えて、音声テキストから言語を学ぶことが重要です。第2言語習得研究では、新しい単語や表現とその使い方を「聞くことによって習得する」ことが非常に重要だと言われています。従来の聴解指導では、音声テキストにふくまれている新しい単語や表現については、あらかじめ教えておいてからテキストを聞くのが一般的でした。しかし、「聞くことによって習得する」ことが重要だとすれば、新しい単語や表現について、テキストの文脈から学習者自身に推測させることが必要です。ここでは、音声テキストとして、未習の単語や表現

をふくんだものを使うことを提案します（未習単語の割合が多すぎるとは難しくなりますが、大体テキスト全体の5～10%程度なら大意を理解することができると考えられます）。未習の単語や表現については、聞く前にすべて説明するのではなく、むしろテキストの内容理解ができた後にとりあげて説明したり練習したりすることを勧めます。

実生活の聴解では、学習者は未習の単語や表現をふくんだものを聞かなければなりません。教室での聴解はよくできても実生活(教室外)の聴解は苦手という学習者を作らないためにも、知らないことばや聞き取れない部分を推測させる活動を初級の始めから導入しましょう。

### 理解の「過程」を助けるとは？

では、「理解できない」部分をふくんだテキストの「理解を助ける」には、どうすればいいのでしょうか。学習者が理解できなかった部分について意味を説明したり、文字のスクリーンを見せたりするのは、理解の「結果」を与えることで、理解の「過程」を助けることではありません。聴解指導では、「理解できない」部分をふくんだテキストを推測などの戦略を使って理解する方法を練習させることが必要です。「戦略」とは、学習者が不足した理解を補うために用いる方策ですが、聴解の主要な戦略として、次の六つがあります。

- (1) 情報を選別する：自分の目的のために重要な部分に注意を集中して必要な情報を選別し、重要な部分にはよく理解できなくても気にせず、切り捨てて聞く。
- (2) 予測する：音声テキストの場面や話題に関する手がかりを十分に活用して、予測してから(あるいは予測しながら)聞く。
- (3) 推測する：知らないことばや聞き取れない部分について、前後の文脈や背景知識から意味を推測する。
- (4) 質問する：人と対面しての聴解では、適切な質問によって理解を確認する。
- (5) 反応する：「聞いて理解する」ということは、聞いた内容を自分の経験や背景知識と照合することで、その結果、驚き、感心、納得、共感などの反応が生まれる。このような反応を表現することも聴解活動の一部として重要である。
- (6) モニターする：「モニターする」とは、理解をチェックすることで、(1)～(5)の戦略をコントロールする最も重要な戦略である。例えば、必要な情報が選別できたか、予測は正しかったか、推測したことはテキストの他の部分の内容と矛盾しないかなど、いまの自分には「何がわかって」「何がわかっていないか」をチェックし続けることである。

### 授業計画のためのガイドライン

未習の単語や表現をふくんだテキストを用い、上で紹介した戦略を積極的に使った聞き方を練習させるために、次の3段階に分けて、授業計画のガイドラインを考えてみました。

**前作業** これから聞くテキストについて学習者の背景知識を活性化するなど、聞く前の準備をする。

**本作業** テキストを数回にわたって聞いて、少しずつ理解を深める。

**後作業** 聞いた後に反応を表現したり、テキストから言語を学んだりする。

#### 前作業

- (a) テキストの内容について学習者が持っている知識や情報、経験などを引き出す。
- (b) テキストに関連した絵や写真を利用して、内容を予測させる。
- (c) キーワードを確認する。ただし、知らない語をすべて説明するのではなく、文脈から推測できそうな語は本作業で推測させる。
- (d) 聞く前に質問を与え、聞きとりの目的を意識させる。

#### 本作業

- (e) 聞く前に予測したことが正しかったかどうか確認させる。
- (f) 1度目に聞くときは大意をとることに集中させ、細部の理解は2度目以降の聞きとりで確認する。
- (g) 知らない語や聞き取れなかった部分を推測させる。
- (h) 理解できなかったことについて質問させる。

#### 後作業

- (i) 聞いた内容について意見や感想を言ったり、書いたりする。
- (j) 聞いた内容に関連して学習者が持っている知識や情報を発表させる。
- (k) テキスト中の単語や表現を学習する。(テキストの空白うめ・再話・ロールプレイ等)

後作業では、「話す」「書く」という産出活動を積極的に導入することで、聞いて理解した言語表現を定着させるという狙いもあります。

対面の聴解では、テキストがあらかじめ決まっていないし、録音のようにくり返しの聴解はできませんから、上のガイドラインがすべて適応できるわけではありません。対面の聴解では、質問の戦略や反応の戦略に重点を置いて練習するといいいでしょう。Rost (1991)には、対面の聴解についての教室活動がたくさん紹介されています。

#### 参考文献

国際交流基金(近刊)『国際交流基金日本語教授法シリーズ5 聞くことを教える』ひつじ書房

Rost, M. (1991) *Listening in action*, New York: Prentice Hall.